

こども ST

公益財団法人世田谷区立総合福祉センター児童係

窪 美保子 (くぼ みほこ)

『心理学ワールド』でも何度か登場させていただいているようですが、私の仕事である言語聴覚士 (Speech Therapist, 以下 ST) は、14 年前に国家資格になりました。残念ながら「こども店長」と違ってこども年齢では受験できません。高卒または大卒後、指定された学校で専門課程を修める必要があります。仕事の範囲は、失語症や高次脳機能障害、摂食嚥下障害、構音障害、発達障害、聴覚障害、吃音、肢体不自由の方のコミュニケーション支援などです。近年は、高齢者施設や脳血管疾患のリハビリなどの成人分野がクローズアップされることが多いようです。けれど、最初に就職した職場が、知的障害児と肢体不自由児の通園施設とお子さんの発達相談室を兼ねたところだったこともあり、以来ずっと、小さいお子さんの言葉のご相談に私は携わっています。そんなわけで、長くなりましたが、私の今の仕事は「こども ST」です。

現在の職場も、0 歳から就学前のお子さんの相談機関です。医師、看護師、保育士、心理士、理学療法士や作業療法士など、さまざまな職種と連携しながら、ST はまず聴力検査や言語検査で評価を行います。検査にもいろいろあるので、お子さんの状況や年齢に合わせて種類を選び、おもちゃも使い、楽しめるやり方を選びます。その辺のスキルについても具体的に書きたいのですが、そうするととて

も長くなるので、割愛 (まさにケースバイケースです)。

その後、他職種と総合的に話し合い、支援方針を決めます。発音不明瞭が主訴でも作業療法が必要な場合もありますし、心理的支援が必要なお子さんもいます。連携して、お子さんとご家族の全体像をふまえてから支援方針を決めるのは大切なことです。その中で、ST は個別でセラピーをやる以外にも、保育士の行うグループに参加して集団での言葉のご相談にのることもありますし、地域の保育園などに伺って先生たちのご相談にのることもあります。

発音不明瞭、吃音、難聴、自閉症や知的障害、学習障害など、お子さんの言葉の心配は多岐にわたります。状況はさまざまですが、どのご家族にとってもお子さんの言葉の心配は非常にプレッシャーです。専門職としての仕事はもちろん、相談にきたことが却って新しいストレスにならないようにすることが大事だと私は思っています。そうした仕事の中で、このコーナーの「ここでも心理学が生きてる」という題にお返事するならば、生きないところはないと思います。検査のデータや分析、観察などは心理学の基礎ですし、発達心理や学習心理の知識、生理学的な視点、カウンセリングマインドの自己一致・受容・共感などのキーワードは何度言い聞かせても過ぎることはないと思います。0 歳の

Profile — 窪 美保子

1996 年、日本女子大学心理学科卒業。同年国立身体障害者リハビリテーションセンター学院 ST 課程入学。相模原市立陽光園療育相談センターを経て現職。国立成育医療研究センター非常勤研究員兼職。



聴力検査機器を使用しているところ

お子さんであっても、私たちは同じ場を共有する人と人であることには変わりありません。心理学的な人への興味や共感そのものが活きる仕事なのだと思います。そのため、自分の力不足が自分にすぐに跳ね返ってきて、自分自身に悔しい思いをすることもしばしばありますが、お子さん自身がコミュニケーションの楽しさを発見する、その場に一緒にいさせてもらえることは、私にとっても、とても嬉しいし励まされることです。そのためにも、日々進歩していく知識 (たとえば、自閉症の医学的な知識、改訂された検査の分析方法、発音記号、サ行を上手に言う練習方法など、変わっていくものはいろいろあります) や幼稚園で流行っているアニメなどを地道に勉強していかなくてはと、こうして振り返ると、改めて思っています。